

音楽

1 目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

2 評価の観点及びその趣旨等

1) 改訂の概要について

[表 1：評価の観点と領域との関係]

観点	ア) 音楽への関心・意欲・態度	イ) 音楽表現の創意工夫	ウ) 音楽表現の技能	エ) 鑑賞の能力
趣旨	音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を身に付け、歌唱、器楽、創作で表している。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴いている。
A 表現	○	○	○	○
B 鑑賞	○	○	○	○

(太斜線は改訂で「鑑賞の能力」に移された部分)

- 観点イ「音楽表現の創意工夫」及び観点エ「鑑賞の能力」の趣旨では、発想や構想に基づき創意工夫して表現することや、鑑賞した楽曲のよさを味わい批評することなど、「**知覚**」と「**感受**」を **かかわらせた学習展開の重要性**が示された。(表 1：趣旨の前半部分を参照)

このことは**音楽科の学習に即した思考力や判断力を育むこと**につながるため、これからの学習指導においてもより一層大切にしなければならない。

- 観点ウ「音楽表現の技能」を評価するに当たっては、従前と同様、**観点イ「音楽表現の創意工夫」と観点ウ「音楽表現の技能」とで評価することが示されている。**

また、**観点エ「鑑賞の能力」を評価するに当たっては、従前では「知覚・感受」に関する観点（観点イ「音楽的な感受」と、「自分なりに解釈したり価値を考えたりする能力」に関する観点（観点エ「鑑賞の能力」）とで示されていたが、今回の改訂では、一つの観点の中で関連させて一体的に見取ることが示された。**

2) 改訂の趣旨について

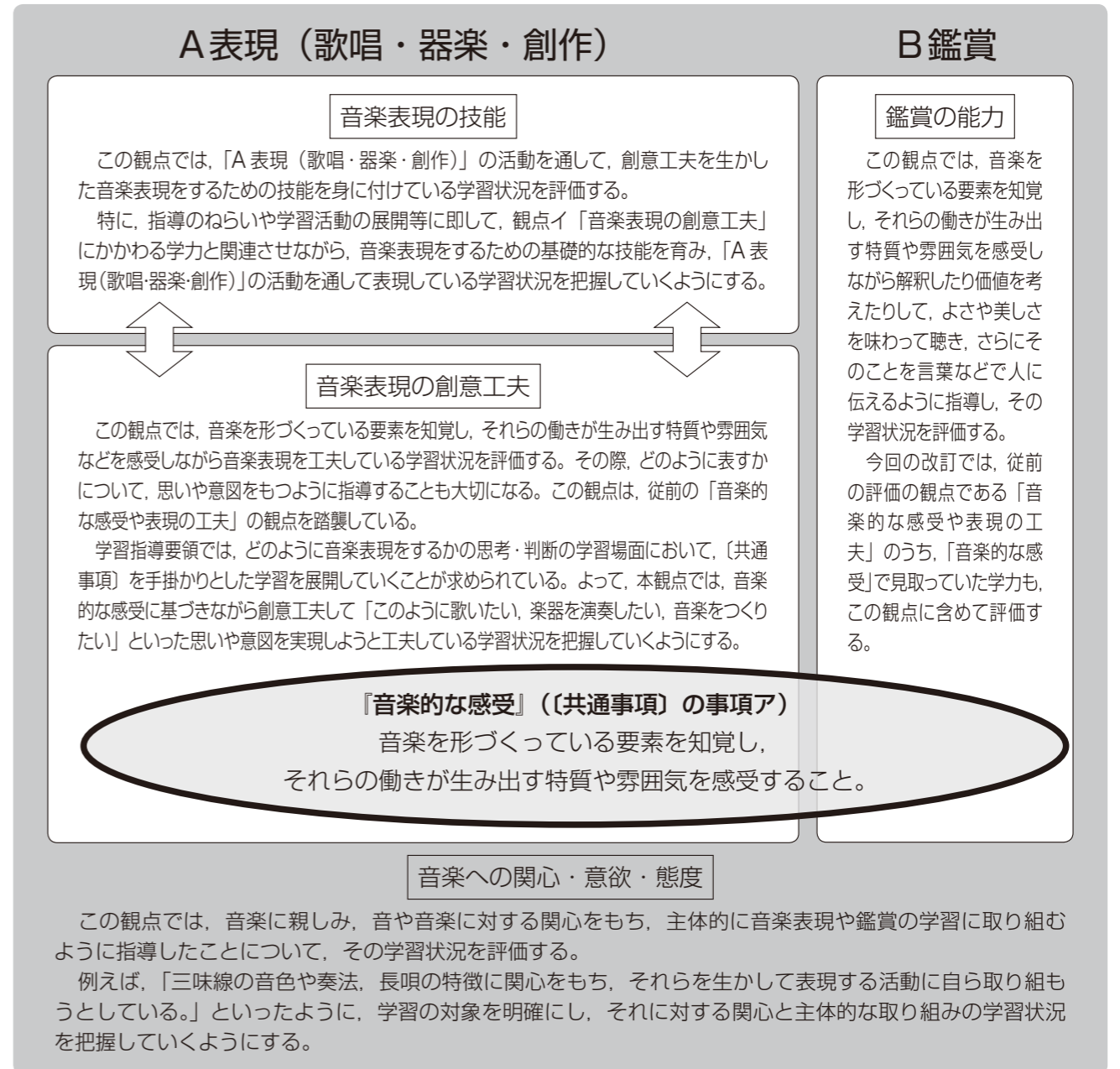
- 観点ア「音楽への関心・意欲・態度」は、学習内容としての音や音楽に対する関心や音楽活動への主体的な取組を評価することである。
- 新しい評価の観点イ「音楽表現の創意工夫」及び観点ウ「音楽表現の技能」の「**音楽表現**」は、「A 表現」の「歌唱」「器楽」「創作」などの**諸活動を指すもの**として、従前の「表現」から名称が改められた。それは、言語活動の場面における、「**思考・判断**」したことを顕在化する意味での「**表現**」と区別するためである。
- 今回の改訂では、従前の観点イで示されていた『**音楽的な感受**』という表記はないが、**このことを評価しないということではない。**『音楽的な感受』については、新しい評価の観点イ「音楽表現

の創意工夫（A 表現）」と観点エ「鑑賞の能力（B 鑑賞）」のそれぞれに位置付けられた。(図 1 を参照)

- ※ 学習指導要領では、**〔共通事項〕を学びの手掛かりとしながら思考・判断する力の育成とその評価の実施を重視している。**そのため、**〔共通事項〕のAにかかわる評価は、観点イ「音楽表現の創意工夫」と観点エ「鑑賞の能力」のそれぞれで評価することが示された。**(表 1：前頁の趣旨の前半部分を参照)

3) 学習内容と評価の観点との関係について

[図 1]



- ※ 『**音楽的な感受**』は、「**音楽表現の創意工夫**」と「**鑑賞の能力**」に共通して位置付けられ、「A 表現」及び「B 鑑賞」のそれぞれの学習を支えるとともに、**両領域の関連を図る上でも鍵となる。**

4) 実際の評価に当たっての配慮事項について

- 「**A 表現**」の学習では、上記図 1 の ⇄ で示したように、「**音楽表現の創意工夫**」にかかる学力と「**音楽表現の技能**」にかかる学力を相互に関連させながら伸ばしていくようにする。
- 「**音楽への関心・意欲・態度**」は、他の三つの観点と密接に結び付いている。「A 表現」及び「B 鑑賞」の活動を通して、学習内容に関心を持ち、主体的に学習に取り組もうとする意欲や態度を育むようにする。

3 改訂のポイント

- ※ 学習指導要領に示された音楽科の学習内容は、表現領域（「歌唱」、「器楽」、「創作」の三分野）、鑑賞領域及び【共通事項】で構成されている。
- ※ 指導のねらいを一層明確にするとともに、音や音楽から知覚・感受したことを基に、思考・判断して音楽を表現したり、味わったことを人に伝えたりする**一連の学習過程を重視する**。
- 新設された【共通事項】は、表現と鑑賞の全ての活動に共通して指導の支えとなるものである。音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る指導や、音楽に関する用語や記号などを**音楽活動と関連付けながら理解する**ように指導など、改訂の趣旨を踏まえた指導が求められる。
- 「創作」については、これまでの課題を踏まえて指導内容が焦点化された。事項アでは「言葉や音階などの特徴」を手掛かりにして「旋律をつくること」、事項イでは「音素材の特徴」を生かして「反復、変化、対照などの構成」を工夫して学習を展開していくようにする。また、**即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視する**。
- 鑑賞領域については、音楽を形づくっている要素を知覚するようにし、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ることができる学習を展開する。
- 楽曲や演奏することの楽しさに気付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさを理解したりする能力を高められるよう、音楽にかかわる用語等を適切に用いながら、自分が感受したことを言葉で伝え合うなど、音楽科の学習に即した**言葉の活用を重視する**。
- **教科目標に「音楽文化についての理解を深める」ことが新たに規定された**。我が国や郷土の伝統音楽についての理解を深めることによって、諸外国の音楽文化との共通点や相違点に気付く学習や、音楽と人間とのかかわり、音楽が社会や生活に果たす役割などを理解することで、**多様な音楽文化を尊重する態度を育成する**。

4 評価規準と本時の展開例

【対象学年：第3学年】

1) 題材名

安来節の魅力を見よう ～声の魅力と節回しからのアプローチ～

2) 題材の目標

「安来節」と「サンタルチア」の発声や節回しに関心をもって、旋律の特徴を知覚し、それによって生み出される特質や雰囲気を感じ取る活動を通して、旋律の唄い方を工夫したり、音楽のよさを味わったりする能力を育てる。

3) 学習指導要領とのかかわり

- ・本題材で指導する事項：A 表現 (1) イ B 鑑賞 (1) ア, イ
- ・本題材で指導する内容：【共通事項】音色、旋律

4) 教材

- ・「安来節」（島根県民謡）
- ・「サンタルチア」（ナポリ民謡）

5) 評価規準

① 領域・分野と評価の観点との関連

領域・分野	評価の観点	ア) 音楽への関心・意欲・態度	イ) 音楽表現の創意工夫	ウ) 音楽表現の技能	エ) 鑑賞の能力
A・歌唱		○	○	○	
A・器楽					
A・創作					
B・鑑賞		○			○

② 題材の評価規準と単位時間における具体的な評価規準

	ア) 音楽への関心・意欲・態度	イ) 音楽表現の創意工夫	ウ) 音楽表現の技能	エ) 鑑賞の能力
題材の評価規準	曲種に応じた発声や節回しに関心を持ち、それらのよさを味わって批評する鑑賞の学習や、それらを生かして唄う表現の学習に主体的に取り組もうとしている。	「安来節」の発声や節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、楽曲にふさわしい発声や節回しを理解するなどして音楽表現を工夫し、どのように唄うかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために、必要な技能（発声、節回し）を身に付けて唄っている。	「安来節」の発声や節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽を形づくっている要素と曲想とのかわりを理解するとともに、楽曲の特徴をその文化・歴史と関連付けて理解し、根拠をもって批評して「安来節」のよさを味わっている。
具体的な評価規準	①「安来節」と「サンタルチア」の発声や節回しの特性に関心をもって聴いている。(鑑賞) ②「安来節」を特徴付ける独特の発声や節回しを生かして唄う学習に意欲的に取り組もうとしている。(歌唱)	①「安来節」の節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、楽曲に応じた発声や節回しを理解して、どのように唄うかについて思いや意図をもって音楽表現を工夫している。(歌唱) ②ゲストティーチャーが示す発声や節回しのポイントについて知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、楽曲に応じた発声や節回しを手掛かりにして思いや意図をもって音楽表現を工夫している。(歌唱) ③独特の発声や特徴的な節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、どのような声や節回しで唄いたいかに思いや意図をもって音楽表現を工夫している。(歌唱)	①曲種に応じた発声や節回しの特性を生かした音楽表現をするために必要な技能（発声や身体を使い方など）を身に付けて唄っている。(歌唱)	①「安来節」と「サンタルチア」の発声の違いや「安来節」の節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。(鑑賞) ②発声や節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史と関連づけて理解し、根拠をもって解釈したり価値を考えたりするなどして、よさや面白さを味わって聴いている。(鑑賞)

評 各学校において具体的な評価規準を設定する場合には、指導のねらい、教材の特徴、学習活動の流れを考慮するなどして、実際の学習活動に即した評価規準を設定する。

評 観点エ①で見取ったことに基づきながら楽曲の特徴等について味わって聴くように指導を工夫する。

評 従前の観点イで見取っていた「音楽的な感受」の部分を、観点エで評価する。

評 観点別に評価を行う際には、配当時間内におけるバランスを考慮するとともに、1単位時間に設定する評価規準を1～2つに絞るなど、効果的・効率的に評価ができるように配慮する。

6) 指導と評価計画（全5時間）

次	時	ねらい	○学習内容・学習活動	評価	評価方法
第一	1	「安来節」と「サンタルチア」を比較鑑賞し、発声や言葉の節回しの違いを知覚し、そこから気付くよさや面白さを文化的背景とかかわらせて感受することができるようにする。	○「安来節」と「サンタルチア」の発声や節回しの違いを知覚し、それぞれのよさや面白さを感じ取る。 ・「安来節」の冒頭部分「やす〜ぎ〜」の部分と「サンタルチア」の「彼方島〜」の部分の繰り返しを比較鑑賞することで発声や節回しの違いについて気付く。 ・気付いたことや、自分の考えをワークシートに記入する。 ・歌詞の背景となる場面などとかかわらせて各自が気付いたことや感受したことをグループ内で発表し、クラス全体で共有する。	ア① エ①	発言の内容 ワークシートの記述

指 知覚したことと感受したことを分けて書けるようにワークシートを工夫する。

		○「安来節」の歌詞が表している意味を考えたり、産字の箇所に入れられた思いについて教師から話を聞いたりして楽曲に対する関心をもち、知覚・感受を深める。 ○学習の振り返りをする。			
第 次	2	五線譜に起こした「安来節」と「安来節(原曲)」との比較鑑賞を通して、節回しの面白さを生かした唄い方を工夫することができるようにする。	○二種類の「安来節(五線譜に起こしたものと原曲)」を比べて、節回しの面白さを知覚・感受しながら、それを生かした唄い方を工夫する。 ・「安来節(原曲)」と音とリズムを五線に起こした「安来節」を比較聴取し、節回しの動きを知覚する。 ・「安来節(原曲)」を聴き、知覚した節回し(線譜)とその特徴をワークシートに記入する。 ○ワークシートに記入したことを意識しながら旋律を唄う。 ・音高や節回しに気を付けて、線譜を見ながら唄う。 ○学習の振り返りをする。	ア② イ①	発言の内容 演奏の聴取 線譜への書き込み ワークシートの記述
	3	ゲストティーチャーの模唱と前時に自分達が工夫した唄い方とを比較し、発声や言葉の発音、抑揚などを手掛かりにしながら、楽曲に応じた唄い方を工夫することができるようにする。	○ゲストティーチャーの模唱から知覚・感受したことを生かしながら、楽曲に応じた唄い方を工夫する。 ・ゲストティーチャーの模唱を聴き、「発声方法」「節回しの付け方と唄い方」「唄の出方」「歌詞の入れ方」について気付いたことをワークシートに記入し、質問する。 ・ゲストティーチャーのアドバイスを生かし、実際に試しながら唄う。 ・学習した表現を生かして、全員で「安来節」を唄う。 ○学習の振り返りをする。	イ②	発言の内容 演奏の聴取 楽譜への書き込み ワークシートの記述
	4 (本時)	独特の発声や特徴的な節回しを手掛かりにしながら、グループで唄い方を工夫することができるようにする。	○前時のアドバイスを生かしながら、グループごとに「安来節」の唄い方を工夫する。 ・前時のアドバイスを生かして唄うことを確認し、唄い方を工夫する部分(フレーズ)を決める。 ・「安来節」の独特の発声や特徴的な節回し(産字)を生かした唄い方について知覚・感受しながら工夫する。 ・CDを聴いて参考にしたり、いろいろな唄い方を試したりして、どのような声や節回しで唄いたいかについて考え、思いや意図をもつ。 ○学習の振り返りをする。	イ③	発言の内容 演奏の聴取 線譜への書き込み ワークシートの記述 評 第3時から継続した学習過程をワークシートに記述した内容や発言等から評価する。
第三 次	5	発声や体の使い方に気を付けながら唄うとともに、「安来節」がもつ歴史的背景を理解して、自分なりに批評しながら音楽全体を鑑賞することができるようにする。	○これまでに学習した表現を生かしながら、楽曲に応じた発声や節回しを生かして唄う。 ・グループごとに工夫した点を紹介しながら、演奏を発表する。 ・発表を聴いて、演奏効果のあった点について話し合うとともに、実際に唄ってみる。 ○「安来節」の歴史的背景を知るとともに、『楽曲の特徴とそのよさ』について自分なりの考えをまとめ、全曲を鑑賞する。 ・これまでの学習を踏まえ、発声、節回しなどを具体的に挙げながらワークシートに記入する。 ・記入したことをもとに話し合い、全体で共有する。 ・「安来節」の全体を通して鑑賞する。 ○学習の振り返りをする。	ウ① 工②	発言の内容 ワークシートの記述 評 評価規準ウ①は、「音楽表現の創意工夫(イ①・イ②・イ③)」を受けて、それを実際の音楽で表現できているかを見取るために配置する。

7) 本時の学習 (本時 4 / 5)

① 本時のねらい

独特の発声や特徴的な節回しを手掛かりにしながら、グループで唄い方を工夫することができるようにする。【音楽表現の創意工夫】

② 本時の展開

	・学習活動 ◇予想される生徒の反応	教師の支援	評価規準と方法
導 入	・前時のゲストティーチャーのアドバイスを確認する。(前時のワークシートを参照) 指 本時のねらいに迫るための発問や指示を精選する。	・アドバイスをまとめたものを提示しながら、前時に学習したことを想起させ、実際に声に出しながら確認していくように支援する。	
展 開	・本時のめあてを知る。 ゲストティーチャーのアドバイスを生かして、さらに唄い方を工夫しよう! ・独特の発声と特徴的な節回しの唄い方を確認する。 ・工夫して唄う部分(「出雲名物」「荷物にならぬ」「聞いてお帰れ安来節」のいずれか)を決め、節回しの特徴(音高、揺れ方)について考える。 指 記入したり、話し合いをさせたりすることが目的にならないように、表現しようとする意図を明確にする。	・めあてと一時間の授業の流れを黒板に提示する。 ・“やす〜ぎ〜せん〜げ〜ん〜”の部分の声の動き方の特徴を図にしたものを提示し、視覚的に理解できるように支援する。 ・節回しを知覚することに終始しないように、節回しが唄い手の自由な感性のもとに付けられていることに気付かせる。	イ③ 発言の内容 線譜への書き込み 演奏の聴取 ワークシートの記述 評 ワークシートには、学習のねらいに沿った項目を設定し、学習状況を評価する。 ・発声や節回しの特徴を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じているか。 ・発声や節回しの入れ方について、思いや意図をもち、表現を工夫しているか。
	・考えたことについてグループで意見交換をしながら、グループ独自の節回しの入れ方を唄いながら工夫する。 例) ◇「いす〜も」の『す〜』は、後半の音が高くなっていくとともに節回しを揺らしてみよう ◇「なら〜ぬ」の『ら〜』は音が低くなるともに節回しの揺れを大きくして、声の音色を暗くしてみよう 指 音楽にかかわる用語等を用いながら、表現しようとする思いや意図を伝え合う。	・発声への意識が外れないようにアドバイスする。 ・各グループを廻りながら活動の様子を確かめて、必要に応じて声の動き方や線譜への表し方について助言する。 指 音楽的な感受に基づく表現が、音楽的な技能を高めることにつながるように支援する。	
ま と め	・音楽的な感受をもとに、発声や節回しの入れ方を工夫しているグループの発表を聴く。 ・学習した表現を生かして、全員で「安来節」を唄う。	・演奏する前に工夫したところを発表させる。 ・発表したグループの表現方法を全員で模唱し、知覚・感受を通して、表現意図を理解させる。	
	・気付いたことや感じたことと実際の表現を結び付けていくことで発見したことを共有する。 ・次時は、全グループが発表するとともに、楽曲の背景について学び、全曲を鑑賞することを確認する。	・表現を試行錯誤していく中で気付いたことを発表させる。 指 本時のねらいに沿った発言ができるように、発問を工夫する。	

③ 本時の評価 【音楽表現の創意工夫】イ③

独特の発声や特徴的な節回しを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、どのような声や節回しで唄いたいかについて思いや意図をもって音楽表現を工夫している。

生徒の姿	十分満足できると判断される生徒の姿の具体例	おおむね満足できると判断される生徒の姿の具体例	支援を必要とする判断される生徒の姿の具体例と支援
音楽表現の 創意工夫	・「にも〜つ〜に〜な〜ら〜ぬ〜」の部分 を節回しと発声の特徴を生かしながら 一息で唄っている。 ・「きい〜て〜おか〜え〜れ〜やす〜ぎ〜 ぶ〜し〜」の「え〜れ〜」の部分の節回し の特徴を生かしながら、変化する声の 音色を意識して何度も唄い試している。	・「にも〜つ〜に〜な〜ら〜ぬ〜」の「な〜 ら〜(産字)」の節回しと発声の特徴をと らえて、唄いながら試している。 ・「きい〜て〜おか〜え〜れ〜やす〜ぎ〜 ぶ〜し〜」の「え〜れ〜」の部分の音高や 音の揺れ方を線譜で表し、唄いながら 試している。	・ただ、何となく声を出 すだけの表現をして いる。 →声の動きを手振り などで表し、唄い方 のイメージがもて るように支援する。

評 「おおむね満足できる〜」に教師の指導が加わることで質的な高まりが見られる生徒の姿を記す。